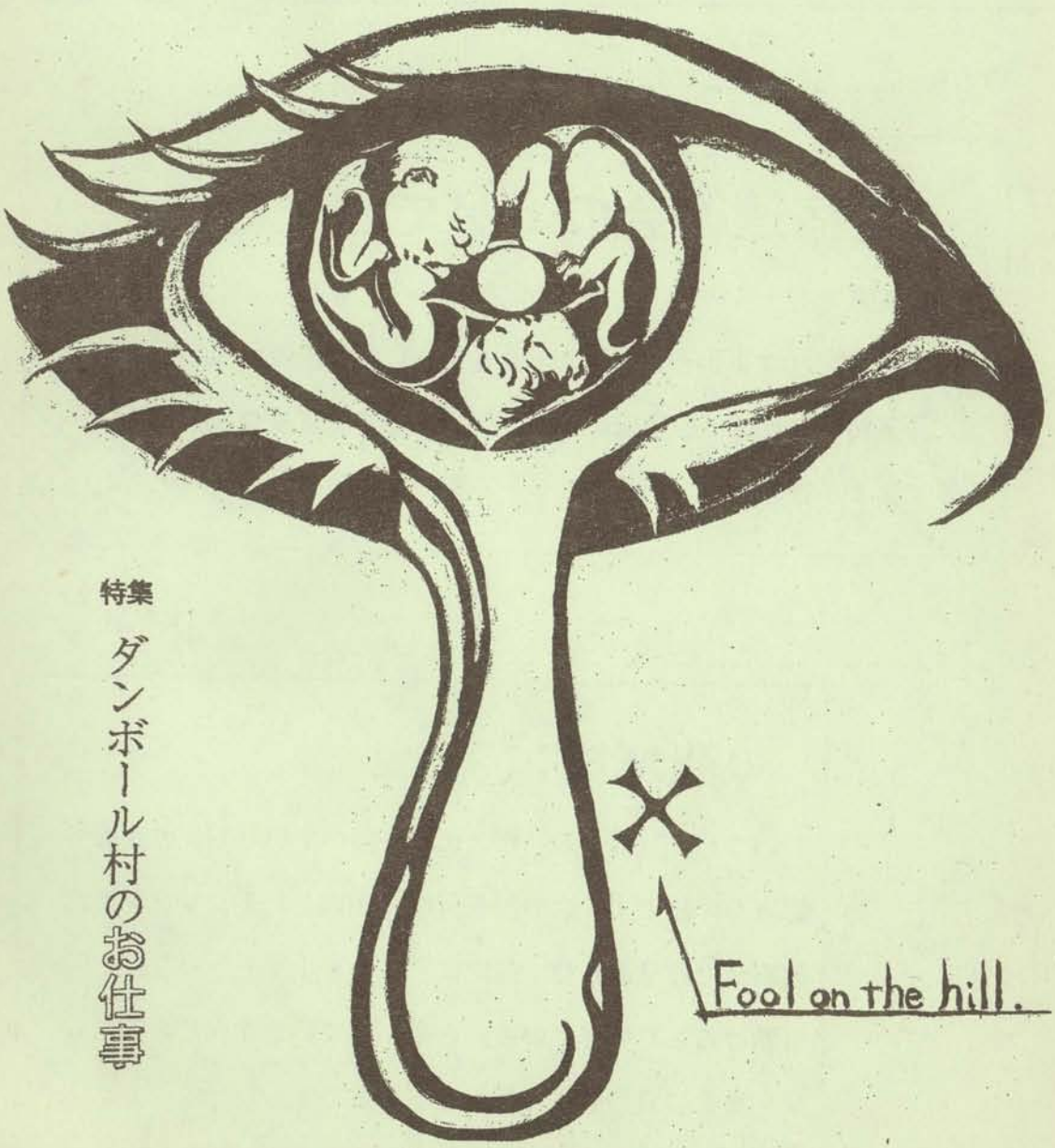
1997年7月31日（奇数月発行）

97・7

新宿ダンボール村通信

編集・発行　新宿連絡会

第5号



特集　ダンボール村のお仕事

定価　300円

第４回新宿夏まつり

８月１７日（日）午後１時～９時

新宿中央公園ちびっこ広場にて

今年は何が飛び出すやら…。ぜひ来てください！

くわしくは同封のビラを！

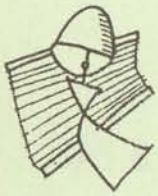
新宿連絡会の本ができました。

『新宿ダンボール村・たたかいの記録』　３２０ページ　２８００円

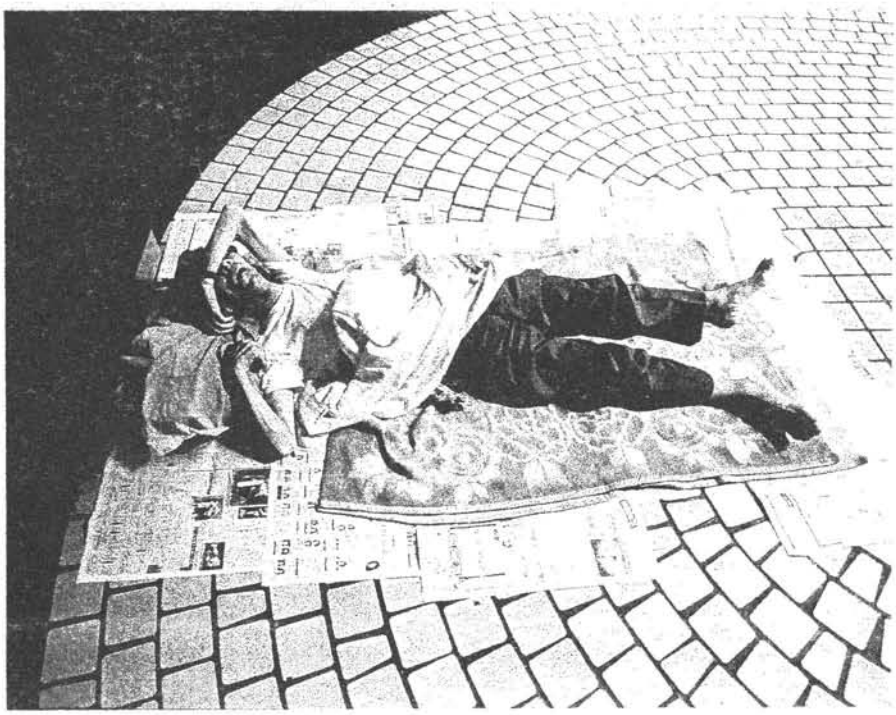
現代企画室（☎０３－３２９３－９５３９）から出版されます。

８月下旬には全国一般書店に並ぶ（はず）です。夏まつり会場でも入手できます。詳しくは同封のビラをご覧ください。

◊表紙の絵について◊



いつもダンボールハウスに絵を描いている画家の武盾一郎さんの絵です。この絵を背中に印刷したＴシャツを新宿連絡会で作りました。前には“Ｉ　ＬＩＶＥ　ＨＥＲＥ”（私はここで生きている）と書かれています。このＴシャツも夏まつりの会場で販売する予定です。



こぐれしげおの「新宿の眼」

【第五回】　路上に寝るとはどういうことか

路上に寝るとはどういう事か、それが知りたくて、かつて何度か新宿の地下街に寝た。

冬の夜の寒さは昼寝で誤魔化し、夏の夜のクソ暑さは地上に逃れて超高層ビル街を吹き抜ける風にあたった。空腹のつらさは、つまり残飯を漁ることの辛さだと理解し、僕はズルくも牛どん屋へ入った。そんな小生に「だったらシラミとマグロ（寝込み強盗）にやられてみな」とあるオッサンは言う。僕は「勘弁して下さい」と笑って逃げたが、以来、路上に暮らすシンドさはこれ抜きには語れないと思っている。

シラミはとにかくカユイ。一度体についたが最後、夜も眠れずカキ続け、皮膚は破れて血が滲む。服に卵を産みつけられたら、荷物もダンボールも捨てなきゃならず、その上、親しい仲間からも「近づくな」と嫌われかねない。

マグロはとにかく怖いし痛い…らしい。寝ている所を襲われて殴られ蹴られ、やっと稼いだ現金や荷物を奪われる。路上で寝てれば身を守るにも、せいぜい紙の壁がある程度、言わば全く無防備だから、なかなかこの手の暴力は防ぎがたい。強盗じゃなくてもストレスかかえて酔った隣人が殴り込んできたり、少年の襲撃の対象にされたりもする。

わずかな荷物を失ったり、最低限の寝場所を奪われたりするという意味で、シラミ、マグロ（暴力）と都の強制撤去は似ている。そう思いながら僕は家路に向かう。

路上に寝るとはどういうことか。最後にやっぱり家がないって事だった。

（木暮茂夫・報道写真家）

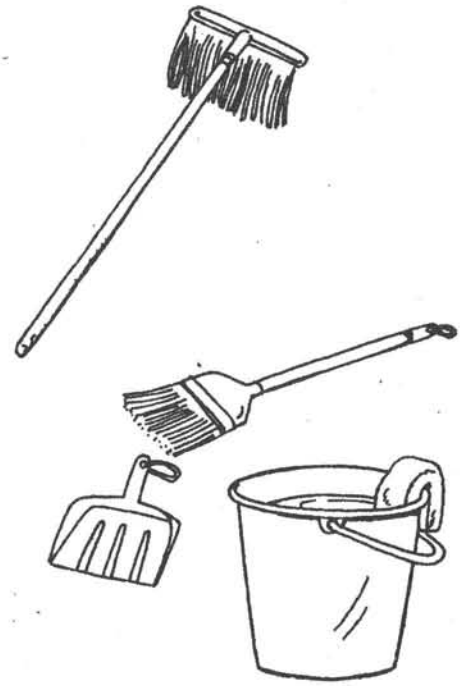
第２弾

ダンボール村の イエづくりムラづくり

ダンボール村のお仕事

住の基本！生活の気力！？
する人いればありがたい、
おそうじ、清掃

ダンボール村の片隅（かたすみ）に、ほうきやちりとり、モップがあります。気がついた人が手にして、おそうじ。「自分たちの住むところだから。きれいにするのが好きなのよ」とおそうじをするＡさん。とは言え、ここは新宿駅前。空き缶、タバコ、紙包み。通行人が落としていくゴミも数知れず。「人に迷惑（めいわく）をかけているもの。私ここに住まわせてもらっているからね」たえず体を動かしつづけけて生きてきたＡさん。せわしなく動くほうきの先、その半生がくっきりと浮かび上がるような後ろ姿を、この村でよく見かけます。



大都会・新宿　　カツカツと音を立てて行き交う人々
忙しいんだ　仕事があるから
自分のため？　生活のため？　理由なんて分からないよ

仕事なくって　家をなくして　路上につくったイエとムラ
暑い盛りのダンボール村　　そこに暮らす人がいる
生活の場所に仕事あり　　生きるための仕事があり

「みんなのためなら、えんやこら
包丁さばきに光るセンス！
飯炊き、盛りつけ、皿洗い」

仲間うちでは通称コック長とよばれているＮさん。真夏のうだる暑さのなか、額に汗して飯炊きをします。体をうごかすことが好きなのか、人によろこんでもらうのが好きなのか。「つくるのが楽しいんだ。食べること？うーん、それにはあまりこだわりがないな」どうして、つくるのが楽しいの？「料理には限界がないから。ここで終わりというところがないんだ」その盛りつけは、大ぜいの人たちの連携（れんけい）プレー。要領のよい人、マイペースな人。それぞれの人柄がにじみ出ます。洗いものはＴさんが主役。お料理が苦手だから？「ちがう。Ｔさんが洗いもの上手だから。隅（すみ）までぴしっときれいに洗うんだ」数百食もの炊き出しのごはん、つくっているのは、こんな人たち。

ちょきちょき、音も心地よく
村の床屋さん

誰が名づけたのか、百円床屋。ハサミをにぎるのはOさん。床屋の経験はないけれど、見よう見まねではじめてみたら、口コミでひろがって、なかなかの繁盛(はんじょう)ぶり。腕の方も、まずまずの評判。しかしよく見ると、できあがりはみんな同じ髪型、坊主刈り。納得すれば、百円は安い！　でも、女性はちょっとご注意を！

しかし残念ながらこのOさん、今は隅田川にうつり住み、床屋さんは休業じょうたい。どなたか名乗りをあげませんか？

時にのんびり　時には過激！？
野宿者の人権求めて今日も闘う
デモ隊・交渉・活動部隊

「労働運動をしようと思ってここに来たんだ」と活動家のYさん。「でも新宿は、従来の寄せ場の労働運動だけではとらえきれないものをはらんでいる。ここでどういう運動ができるのか、それを考えていきたい」彼らが新宿の野宿する人の間にとびこんできたのは、3年前の行政による野宿者への追い出しがきっかけでした。今では、毎週路上を見まわり、病気の人に声をかけたり、福祉の窓口を通して医療保護を受けたり、仕事に行ったもののお金をもらえなかった人がいたら一緒に交渉をしに行ったり、野宿者を襲う子どもがいたらその場で説教をしたり、仮設住宅や労働の保障を求めて行政へ申し入れをしたりと、さまざまの活動をくりひろげています。

「彼らに出会ったときは、頭をがつんとやられたみたいに・・」と話してくれたのは、活動に熱心に参加しているTさん。「それまでは、追い出されたら追い出されっぱなし。どうにもならないことなんだと、すっかりあきらめきっていた。だから、こんなやり方があったんだ、と。こうして怒っていいんだと、初めて分かったんだ」

病人あらば東へ西へ　頼りにしてるよ！　病人対応係さん

ピーポーピーポーピッ。救急車の音がひびきます。体の弱った人や高齢者も多いダンボール村では、病気はすぐとなりあわせ。冬の寒さも夏の暑さも、体に直にこたえます。

去年の夏、ふらりとこの村に舞いこんできたＩさんは、みんなよりひときわ若い年れいながら、医療にくわしく、病人がでれば、自然とたよられる存在に。「倒れている人にあったら、まず息をしているかどうか確かめる。おどろいている場合じゃないから」たんたんとした口調でかたるＩさん。ダンボール村としての特ちょうは、肝硬変などアルコールによる病気の多いこと、栄養失調など食生活の影響が多いことなどをあげます。「救急車を呼ぶと、新宿西口路上というので、まずホームレスかどうかを聞かれる。それから、酒をおびているか、身なりがきれいかどうかを聞かれる。あてはまったら、受け入れてくれる病院は、ほとんどない」

この腕一本で生きてきたんだ。そんな自慢がぽんと出る、現場で仕事をこなしてきた人にとって、体がきかなくなることは、どれほどの思いをかかえるのでしょうか。「でも多分、一人ぐらしの老人よりはめぐまれていると思うよ」とＩさん。「ほかに頼るものなんてないから。だから、みんなお互いのことはとても気にかけながら暮らしている。一人で死んで、一ヶ月も半年も誰にも気がつかれないなんてことは、まずないから」

ダンボール村のオアシス
心なごませる動物たち

姿をみれば、ついついにっこり。
ほかにはマネのできないお仕事！？

かけ合い上手！人情商売！リサイクルフリーマーケット

なぜだか最近、とっても生き生きしているのが、自称「フリマ班」こと、フリーマーケットをしている人たち。古着や日用雑貨などのリサイクル用品を、毎日曜日に新宿中央公園で売っています。「場所とりがたいへんでさ」「疲れちゃうわよ」なんて言いながら、ふしぎなくらいに生き生き、笑顔。どうして？　何でそんなに生き生きしてるの？　よくよく聞いてみると、お客さんとのかけ合いが楽しさの秘密のようです。やはり女性が多いなか、男性の参加もちらほら。

ちなみに「フリマ班」では、お店に出す品物を大募集中。きれいな洋服、必要のない雑貨などありましたら、ダンボール村に届けてくれませんか？　売上金は、路上に暮らす人の炊き出しの用意に使われています。

ダンボール村とは、何ぞや！？

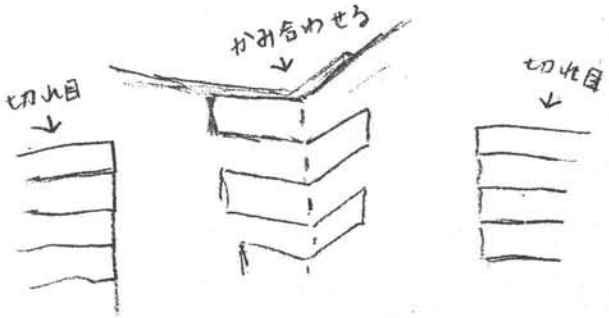
さて「ダンボール村」という言葉は、いつどこから出てきたのでしょうか。調べてみると、どうやら一九九六年一月二四日の都による強制撤去以前、B通路と呼ばれた地下道に人々が常設のダンボールの家を建てはじめた時、主に取材などで訪れたマスコミの関係者が「ダンボール長屋」「ダンボール村」という言葉を用いはじめたのが最初のようです。撤去の噂が出始めた頃から「村を守れ」というスローガンのもと、とりあえずの仮の住まいとダンボールで建てられた家々に「村」という認識が定着するようになり、去年の夏頃から「ダンボール村」の宛名で郵便物も届くようになりました。この「ダンボール村通信」という名も、主に常設のハウスに住む人たちの多数決により決まったものです。とは言え、都内で野宿をする人の全体数からすれば、常設のダンボールハウスを建てている人は、ごく少数。今なお多くの人が、大変な状態で野宿を強いられていることは、当然新宿のごく一部の野宿者のみで論じられるものではありません。

でも、家を失った人達が、とにかくもダンボールで家を建てて住んだこと、そして「村」とも呼ばれるある種のコミュニティーを作りだしたことは、それ自身のとてつもないすごさ、人の生きる力のすごさのようなものを感じています。

ダンボールハウスづくり、その後・・・

さて、前回の「ダンボール村のイエづくりムラづくり」ではダンボールハウスのつくり方をご紹介しましたが、その後住人の人たちからクレームが。「あんなの単なる規格サイズ」「俺のハウスはまた違う」と筆者に非難(ひなん)集中。かくして、臨時のダンボールハウス講座があちこちで開かれることとなりました。その中から、心に残ったものを、いくつかここにご紹介します。

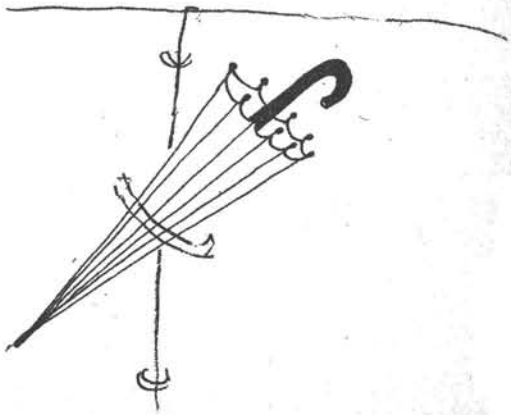
組み立て取りはずしが簡単なように、ダンボールの端に切れ目を入れ、交互に組み合わせる。湿気によりふくらんで、風を通したり防いだりと温度調節効果もあるそう。・・ん？　これはもしや、正倉院のあぜくら造り？



「一に乾いたダンボール、二に乾いたダンボール、三四がなくて、五に乾いた毛布があれば・・」

「町はいろんな人が歩いているから。何も見えないのは怖いんだ。いつ何が起きても助けを呼べるように、天井は絶対につくらない。夏は涼しいし、囲いのままがいい」

支柱は何も板きれとはかぎらない！



あ の ね …

・山川勉さんのお話・

俺の話？　俺の話かぁ。話す事なんて何にもないよ。今まで話してきたとおり。どうってことはないからさ。俺のことなんか書いたってしょうがないだろう。

しかし、あんたも物好きだなぁ。こんな所へ来ていても、何にもいいことなんかないぞ。もっと青春を謳歌しなくちゃ。俺がここに来たのが、ちょうどあんたが来はじめた頃だから。同じぐらい、お互いよく続くよな。いや、俺の方がもうちょっと早かったんだ。あそこに住む前に、もっと駅よりの所に住んでいたから。公園でおじさんに声をかけられてね、色々面倒を見てもらって。でも、そこに住んでいた時は家賃というか、お金を払ってたんだ。変な話だよなぁ。現場で仕事に入ってもその大方は払うんだから、ばかばかしくなって、こっちに移ってきた。

ここに住んで思ったのは、ここはお金がかからなくていいなぁ、と。電気代、水道代、ガス代、部屋代、そういうものがかからないからね、ここは。このハウスは、自分一人でつくったんだよ。え？　このくらいは一人でつくれるさ、じゅうぶん。引き戸にしてある、これなかなか珍しいだろう。え？　天井のこれか。　何だと思う？　煙突？　まぁ、そうだよ、タバコの煙を出すようにつくったんだ。あんたは、この辺のダンボールハウスに描かれている絵で、これが一番好きなのか。うん、描いてもらって、自分でもなかなか

気に入ってるんだ。絵描きさんがさ、「描かせて下さい」っていうから、「どうぞ」って。でも、描き上がったのを見て、ぎょっとしたなぁ。ぎょっとした。俺の内面がそのままそこにあったから。そのまま描かれていたから、びっくりした。俺の内面は、だから、このままなんだよ。まるで地獄絵図だろう。

ここは色々な人がいるから。まぁ、人に迷惑をかけないように暮らしている。電気スタンドがあるから、本を読んだりするよ。こうやって、ラジオを聴いたり。不思議なことにね、ダンボールハウスの中の音は外には聞こえないけど、外の音はよぉく中までひびいてくるんだ。夜はね、靴の音で眠れなくなったりする。死んでしまおうかと思ったり。

この間、あんたの家の方まで仕事で行ったよ。仕事は、うん、体がこうだから、ちょっときついけれど、でもしばらく歩いていると慣れてきて、平気になるんだ。ここに住んでいる若いのが一緒の現場だったよ。続かないだろうと思っていたら、やっぱり、二、三日だった。またお金が貯まったら、カンパをわたすからさ。おじいさんとかいるだろう。どうしようもないもんな、歳とったら。こんな所にいて、かわいそうだ。え？　俺は、もういい。いいんだけれど・・。あんたは若いんだから、幸せになれよ、なぁ。もっと派手な服を着て、遊びに行かなくちゃ。

スーさんの地下街物語
最終話　スーさんの“夢”

「服はね、施設（なぎさ寮）でもらったんだ。サイズがちょっと大きいけどね」

品川行きのバスに乗ってから二時間後、なぎさ寮近くの喫茶店で、僕はスーさんと向かい合っていた。青いジャンパーとスラックスに身を包み、ボウボウだった髪もキレイに散髪されている。こうして見ると、つい最近まで路上生活をしていたとは思えないほどの変わりようだ。

「施設には十日くらい前に入ったんだ。そんなに居心地は良くないけど、まあ、仕方ないよね」

寡黙だったスーさんが、いつになく良くしゃべる。取り留めのない世間話の後、僕はずっと抱いていた疑問を切り出した。施設嫌いのスーさんが、何故、なぎさ寮に入所したのか――。

「地下通路は撤去されちゃったし、新しい場所（インフォメ前）もいつまで居られるか分からないだろ？　これ以上新宿に居ても仕方ないと思ってね」

しかし、なぎさ寮も入所期間が過ぎれば、退所しなければならない。その後はどうするつもりなのか？

「生活保護がもらえるんじゃないかと思ったんだ」

一瞬、その言葉の意味が分からなかった。数年前、スーさんは「年齢が若い」という理由で生活保護（以下生保）の適用を却下されている。なぎさ寮に入ることと生保にどう関係があるのか？

「路上にいるとき友達から聞いたんだ。なぎさ寮に入れば、六五歳にならなくても保護がもらえるって…」

これを聞いてようやく意味が分かった。通常、福祉事務所で生保を申請すると、六五歳未満の人は適用されないケースがほとんどとなる。「六五歳未満の健康な人は、自分で仕事が見つけられる」というのが建前だが、その背景には生保適用後の受入先となる更生施設の不足がある。現在都内にある更生施設はどこも満員状態が続いていて、新規の入所者がどうしても制限されてしまうのだ。

ところが、なぎさ寮がオープンされる越冬期には、生保適用者が多く出た場合を想定して、行政側は意図的に施設の空きを百人分以上も確保する。このため六五歳未満の人にも

生保が適用される可能性が高くなるのだ。

もちろん、スーさんはこうした行政側の事情など知るべくもない。単なる仲間同士のウワサ話に希望をつないだにすぎない。しかし、もし生保が適用されなかった場合、どうするつもりなのか。彼は全ての荷物を新宿に残してきた。生保が受けられず再び路上生活をする羽目になったとき、荷物なしでは困るだろうに……。

「大した荷物があるわけじゃないし、それに……」

しばし沈黙するスーさん。やがて小声で言った。

「置いてった方がいいと思って……」

なぜ置いてった方がいいのか――結局、それ以上は聞けず、未だに理由は分からない。しかし僕はこんなふうに想像している。あえて荷物を置いてきたのは、新宿を去るためのキッカケのようなものだったのではないか、と。新宿に関するものを全て残してくることで、彼は長かった路上生活に踏ん切りをつけようとしたのではないだろうか、と。

様々な事情を経て新宿にたどり着いたスーさん。六年間暮らした地下通路も今はない。行き場を失った彼が最後に頼ったのは、仲間同士の単なるウワサ話。そこに一縷の望みを賭け、全ての荷物を捨ててなぎさ寮へとやって来た……。もしそうだとしたら、何ともやるせない話ではないだろうか。

「生保がとれたらね、墓参りに行きたいんだ」

突然、スーさんが言った。

「オヤジ（養父）の墓がね、板橋の方にあるらしい。俺は今まで家族らしいことをしなかったから、最後くらいはそういうこと、しようかなと思ってね」

考えてみたら彼が未来の“夢”を語ったのは、これが初めてだったかもしれない。

その後、スーさんの生保受給が決定した。今は品川区の更生施設で元気に暮らしている

「居心地はマアマアだけど、相部屋なのがチョットね」

職員に頼んで、いずれは個室の老人ホームへ移してもらう予定だという。

「墓参りにはまだ言ってない。今はまだそういう立場じゃないから……」

先々のことがしっかり決まってからでないと、養父に報告はできないのだそうだ。

「新宿？　そりゃ戻りたくないよ。地下街も大分変わったのかなあ」

つらく悲しいスーさんの地下街物語も、いつしか思い出に変わりつつあった。

（坂井敦・ルポライター）

第15回全国　地域・寄せ場交流会に参加して

7月５日、６日の両日、神奈川県の三浦半島で「第15回全国　地域・寄せ場交流会」が開かれました。これは各寄せ場や地域で日雇い／野宿労働者の支援活動をしている人たちが集まり、交流する場で、年に1回開かれています。今回は新宿からも支援者や野宿の当事者10人が参加しました。

以下は参加したお二人の報告と感想です。

私、池田は７月５日、６日の２日間共、分科会のうちの「アディクション」に出ました。

「アディクション」とは、「依存症」のことです。

「依存症」とはなにかのきっかけで、ある物事について自分で自分が思うようにならなくなり、その物事が無しには生きて行けないと思い込んだり、その物事のために身体を悪くしたり、生活をぼろぼろにしたり、周りの人に迷惑をかけて人間関係がぐちゃぐちゃになったりと、悪いことばかりなのにやめられなくなっている心の病気のことです。

皆さんも聞いたことのあるものでは、「アルコール依存症」とか、「薬物依存症」、「ギャンブル依存症」などがそうです。

今回の分科会では面白いことに、寄せ場の支援者が基本的に集まっているのですが、「自分もアルコール依存症かも知れない」という人や、「僕は、周りの人からパチンコ依存症だと言われる」という人も参加していました。

私自身、医療・パトロール班で活動するうちに、アルコールが原因で病気になる仲間や、中には死ぬ仲間に何度も会い、色々勉強しているうちに、野宿になる前の私は「アルコール依存症」だったことが判ったぐらいです。

分科会に参加している人たちの中では、寿や山谷や釜が崎の人などは、かなり以前からこの問題に取り組んでいて、それなりの成果も挙げており、対応の仕方も慣れているようですが、新宿を始め、仙台や京都や神戸の人はまだ、どこから手を付けたらいいのか判らないと、真っ二つに分かれていまし

た。そのためか、一人一人の自己紹介から分科会が始まったのですが、とっかかりのまだ判らない私等の話はもどかしく狂おしいのですが、ベテラン勢は悠然と「そろそろアディクションからは卒業したい」などと言ったり、にこにこ微笑んでいるだけで捉え所がない感じです。

5日は寿生活館の人が司会者でしたが、この人は寿での「アルコール依存症」に対する取り組みの第一人者で、そのことを小さな本にまとめているような人です。ところが、6日は用事があってその人が来ないので、急遽私が司会者にされてしまいました。詳しい人の後に私のような駆け出しに押しつけられ、非常に困りましたが、山谷の“ほしのいえ”の人（この人もベテラン）に助けを借りながら、何とかがんばりました。

2日間話し合っても、これといった結論は出ないのですが、とりあえずどこか寄せ場や野宿の場所から離れたところに、治す気になった仲間たちが集まることが出来て、本音で話をしたり、時間を潰したりできる場所を作るのが、支援者の第一の仕事なんじゃないかということ。そして、普段の心掛けとしては余り支援者が必死になり過ぎると却って良くないので、少し突き放すというか、「あんたの問題なんだから、あんたの好きなようにしたら」ぐらいの気持ちの方がよいということが出ました。

しかしよくよく考えてみれば、寄せ場や野宿の支援者というのは、大体が他人事を自分のことのように熱心にやる人間ばかりなので、これは難しいことです。とにかくも、今後も各地の支援の仲間と連絡をとりあいながら、「アディクション」に苦しむ仲間の力に少しでもなれるように、勉強していきたいと思います。

池田大介

（連絡会医療・パトロール班、ダンボール村住人）

今回、私は初めてこの交流会に参加しました。新宿駅西口での医療相談に今年の正月から月一回の参加させて頂いていますが、まだまだ先輩方の事

や、新宿連絡会の活動について知らないことばかりです。また、全国の寄せ場の状況を知り、今後の西口での医療活動に役立てることはないか、自分は反省すべき事はないか、考える機会として参加しました。分科会はテーマ「医療」に参加しました。

「医療」の分科会には各地区から全部で二十人弱の参加者がありました。それぞれの地域から資料とともに活動の成功例や、現在困っていることなどを紹介しあい、話し合いが持たれました。「医療」の分科会での話の中心は、

・救急搬送・救急車要請の対応の仕方、救急隊への批判

・新宿でボランティアと救急隊との話し合いがあった事への評価

・路上生活から入院となった人へのお見舞いの件

先輩を連れていった病院の看護婦から「あなた達は浮浪者を病院に連れてくるだけ連れてきて、あとの始末をわたくし達に押しつけているではないか」と言われた。

・医療体制への批判

安田病院が例に挙げられ、「あんな病院は早急に診療停止にすべきである」のに、今現在、安田病院に入院している患者を受け入れる病院が他にない。生活保護の患者など、吹きだまりの患者の受け皿となり、もうけている病院があるという医療体制への批判。

現在の医療システムは、住居があり、健康保険を持っていることが前提としてあり、路上生活者や、住所不定者に対する医療体制は十分でない。

生活保護の患者に対する対応が違う、露骨に医者や看護婦が嫌な顔をする・・「あんたほんとに医者なのか？」。医師を中心とした医療従事者は「路上生活者＝浮浪者＝まじめに仕事をせず勝手に落ちぶれた人」というイメージを持って診療にあたっている。

等、多くの意見がでました。

参加者の多くは、医療現場への不信感が強いと感じました。医療との関わり方は、対立し権利を勝ち取っていかなければならないのか、協調と妥協の中で目標を達成させていくのが良いのか、それぞれの地域で実践していくことを確認し、閉会となりました。

自分はこの会に参加し、現場で支援している方の考えや意見に触れる良い機会が持てました。新宿連絡会の方と一緒に今後の活動に生かしていきたいと思います。

吉川徹

（医療相談ボランティア医師、東京都立墨東病院）

収容所設置をめぐる攻防　6～7月の経緯

6月5日　新宿区議会に対し、区議会として北新宿ホームレス収容所の白紙撤回を都に要求することを求め、都区協議の上で抜本的な対策を講ずるよう求める陳情書を提出。北新宿住民らで作る「設置反対協議会」も白紙撤回を都に要求することを求める請願書を提出。

6月10日　東京都第三建設事務所は、新宿西口広場のエルタワー側の柱に突如としてプランターを設置。ここは夜になると仲間がダンボールで囲って寝る場所だった。

6月13日　陳情、請願の双方が新宿区議会福祉衛生委員会で審議される。内容が同じであるにもかかわらず、住民側の請願は採択され、新宿連絡会の陳情は自民・公明の反対により継続審議となる。

6月14日　北新宿現地で「東京都による強制排除を許すな！北新宿ホームレス収容所反対！６・１４集会・デモ」が行われる。新宿の仲間を中心に１７０人が結集。

6月28日　西早稲田で収容所設置反対の屋内集会。１２０人が結集。

7月14日　週刊誌「ＡＥＲＡ」に意見広告「人権を守って、青島サン」が掲載される。
個人1000人以上、団体 130以上もの賛同を得た共同声明をもとにした意見広告を作成。共同声明の内容の骨子は①今後、強制排除をしないこと　②当事者との話し合いを行うこと、の２本（ご協力してくださった方、ありがとうございました。）

7月15日　都庁に対する統一行動。
西口ｲﾝﾌｫﾒｰｼｮﾝｾﾝﾀｰ 前で集会後、申し入れ団と新宿の仲間１００人が都庁に向かう。都庁周辺を練り歩き、シュプレヒコールを上げる。申し入れ団は都庁に入り、都知事秘書と面談。共同声明を渡すとともに、申し入れ書、公開質問状を提出。また新宿の仲間の代表は「新宿駅西口地下広場に起居する野宿者一同」の名で、「（仮称）自立支援センター（暫定実施）入所対象者への説明会」（７月30日）の招待状を渡す。内容は、北新宿収容所に関して地域住民が開催した５月10日の説明会に都が出席したように、入所予定者に対する説明の場を設定するから都の担当者が来てくれ、というもの。出欠を知らせるための返信用ハガキ（ダンボール村あて）も渡し、必ず回答してくれ、と要請したところ、秘書は「わかりました」と答える。

7月24、25日　東京都第三建設事務所による「一斉清掃」

今年3月に続き、計4回目。前回は抜き打ちでフェンスを設置したが、今回は初日に「今回はフェンスやプランターの設置はしない」との言質を取り、無事、清掃は終わる。

7月25日　公開質問状と「説明会」への出欠の回答期限が来るも、都から返答はなし。

7月30日　「説明会」に結局、都は来ず、「来れない」という返答さえ寄こさなかった。急遽、「なんで来ないんだ、東京都！説明会ボイコット弾劾集会」に切替え、集会をおこなう。仲間からは「ルールを守っていないのはどっちだ」「当事者に説明すらできないのだから、よほど後ろめたいことをやろうとしているにちがいない」という声が相次ぐ。

＊この間、新宿連絡会は毎週木曜、金曜に北新宿と周辺地域において情宣・練り歩き行動を展開。毎回、３０～４０人の仲間が参加して、住民に収容所設置反対を呼びかける。当初、都が6月に予定していた収容所の開所は大幅にずれこみ、未だメドが立っていない。新宿の仲間は収容所設置とセットとなった排除攻撃をくい止め続けている。

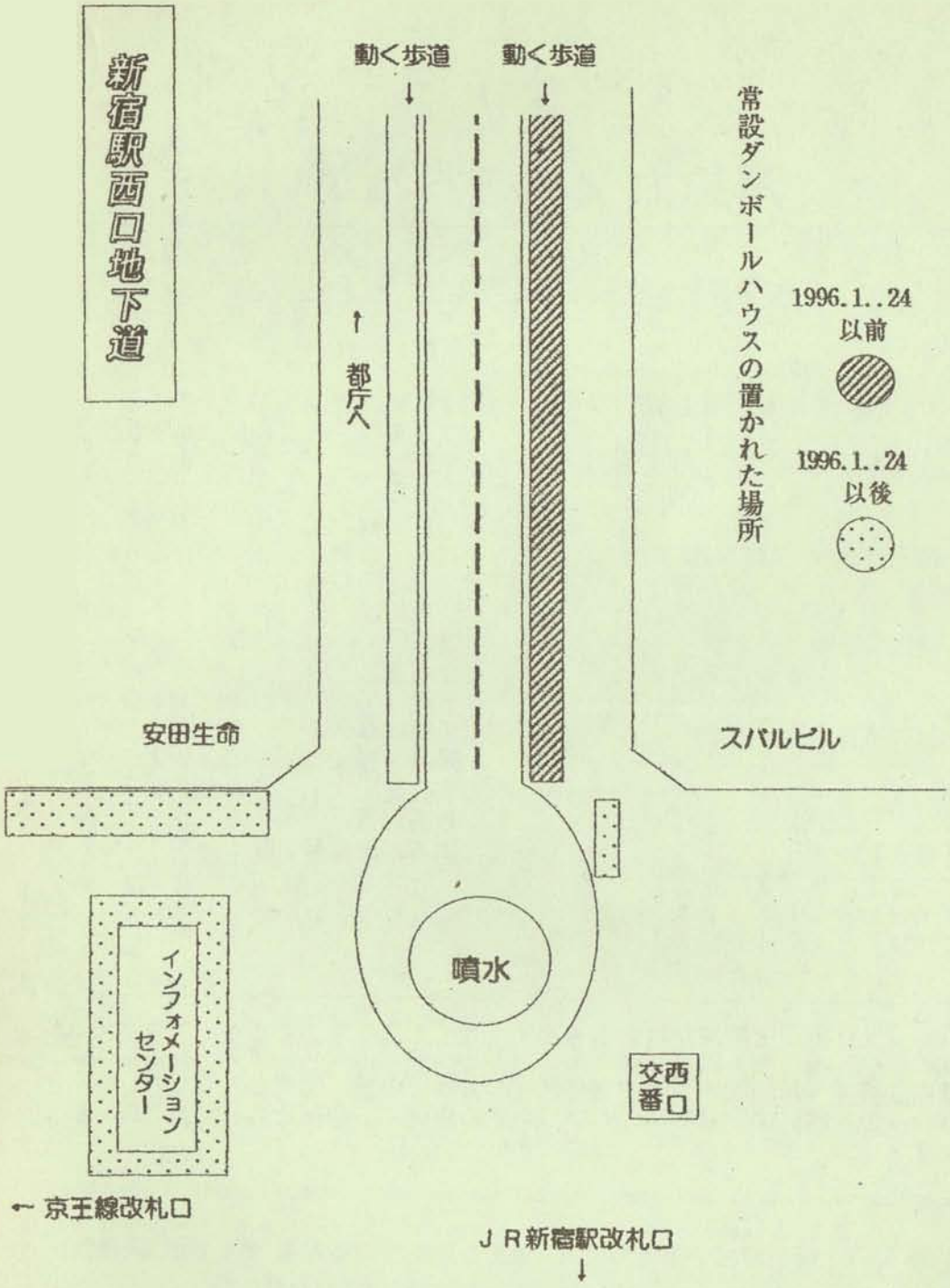
４・２９弾圧、国家賠償請求を提訴！

4月15日から1か月間、新宿西口地下広場で連日、続けられたガードマンによる「退去勧告」。これに対する抗議行動に対し、新宿署は不当にも3名を逮捕するという暴挙に出ました。（3人とも処分保留で釈放される）　この際、被弾圧者の一人、新居崎邦明さんに対し、新宿署は取り調べ時に、指を反対側に折り曲げる、指紋採取用の黒インクをゴムローラーで顔や首に塗りたくるなどの信じがたい暴行に及びました。

新宿連絡会や新居崎さんの所属する森産業・微生研労組などは、この人権侵害を東京都と新宿署の野宿労働者への対応の差別性を露にしたものだと考え、「４・２９新宿野宿労働者弾圧国賠訴訟を闘う会」（略称４２９の会）を組織し、東京都、警視庁、新宿署、暴行警官に対する国家賠償請求裁判に取り組むことを決め、7月２５日、提訴致しました。是非、多くの方のご支援をお願いします。

連絡先：新宿連絡会、または０３（３６３７）７０９２　森産業微生研労組・新居崎

カンパ送り先：郵便振替口座　００１００－３－３９７０６０「４２９の会」



◎この地図をさかさまにして、表紙の絵と比べてください。
"Fool on the hill"（オカノウエノバカモン）の場所にあるのは・・・

連絡会財政危機！

緊急カンパをおねがいします。

会計報告（５～６月）

【収入】

カンパ　２８４、６３３

救援カンパ
　　１５９、９０１

路上カンパ（含む通信等売上）
　　１３２、３９０

通信会員費（２２口）
　　１１０、０００

ﾌﾘｰﾏｰｹｯﾄ売上
　　２９、３２２

　　７１６、２５４

【収支】
　△１、０００、６７１
【繰越金】　６７７、１４８
【残高】△３２３、５２３

【支出】

炊事関連費	５１７、３２２
交通費	１６９、０００
発送費	６４、９６０
印刷費	１２０、０７３
ﾊﾟﾝﾌ 印刷	２５５、３５７
ｺﾋﾟｰ・ＤＰＥ	２０、３８８
文具・図書費	５、９４５
車両関連	６３、５１３
電話代	３５、２４７
会場費	１５、０００
薬代	７、１４０
新聞折り込み	５、１９７
備品・雑費	１４、２３６
集会賛同	３、０００
救援対策	１８６、０１６
山谷米代貸付	２３４、５３１
計	１、７１６、９２５

☆カンパ送り先⇨郵便振替口座　００１７０－１－７２３６８２「新宿連絡会」

通信会員費（年5000円）をお振り込みの方はその旨、明記してください。
カンパのお願いばかりでいつもいつもすみません。今後ともご協力お願いいたします。

編集・発行：新宿野宿労働者の生活・就労保障を求める連絡会議（新宿連絡会）

連絡先：〒111 東京都台東区日本堤 1-25-11　山谷労働者福祉会館気付

☎０３（３８７６）７０７３　FAX ０３（３８７６）１８６９

現地：〒160 東京都新宿区西新宿 1-1-1　ｲﾝﾌｫﾒｰｼｮﾝｾﾝﾀｰ 前　新宿ダンボール村

☎０３０（８１８）３４５０